



小松崎黎子実行委員長と高橋和彌会長

第三十八回現代俳句茨城大会は、海の日の  
令和三年七月二十二日、笠間市の友部地域交  
流センター「トモア」において、六十六名の  
出席のもと開催されました。  
十時に受付を開始、待ちわびた人達の熱気  
が伝わって来ましたが、大会直前になり残念  
ながら講師に予定しておりました、現代俳句  
協会副幹事長の佐怒賀正美先生が、コロナ禍  
の中、東京からおいでになる事が出来ず、急  
遽、欠席になってしまいました。

大会は、十一時より、山口事務局長の司会  
と開会のことばに続いて、小松崎黎子大会実  
行委員長、高橋和彌茨城県現代俳句協会会长  
の挨拶、来賓祝辞として、矢須恵由茨城県俳  
句作家協会会长、鶴岡しげを前茨城県現代俳

句協会会长に、お言葉をいただきました。

# 第三十八回現代俳句協会会報

## 第二十九回作品奨励賞発表

## 第三十八回現代俳句茨城大会

No.139  
2021年11月

ついで、第二十九回作品奨励賞の発表に先立ち、山口事務局長より選考経過報告があり、受賞者二名の発表と表彰が行われました。奨励賞受賞者を代表して、永井淑子氏が謝辞を述べられ、写真撮影の後、午前の部を終了しました。

昼食休憩後、課題句の選に入りました。このあと、講師の記念講演を予定しておりましたが、講演中止の為、出席者全員の前で、課題句の披講を、根本菜穂子氏と高野よしこ氏が行い、点盛りを、飛田伸夫氏と山田健太氏が行い、採点の間、小休憩となりました。

その後、募集句の成績発表を山口富雄氏が行い、並びに表彰へどうなりました。

課題句の成績発表の前に、募集句と課題句の講評を、高橋和彌会長を始め、特別選者の方々にいたしました。

続いて、課題句の成績発表を山田健太氏が行い、表彰にうつり、入賞者にそれぞれ賞状と賞品が授与されました。

昨年は、コロナ禍の為に、紙上大会となりましたので、久々にお逢いする会員の方々との楽しい時間が過ぎて行き、最後に、山口富雄氏の閉会のことばで大会を無事終了しました。

(文責・高野よしこ)

# 第三十八回 現代俳句茨城大会

知事賞 小沼 悅子氏（募集句の部）  
大野ひろし氏（課題句の部）

## 〔募集句の部〕

茨城県知事賞

小沼 悅子

茨城県俳句作家協会長賞

川崎とみ子

13点(2)

お守りのように置かれる余り苗

8点①

草萌ゆるやわらかな嬰丸く抱き

茨城県議会議長賞

笠原 真枝

茨城県現代俳句協会長賞

大野ひろし

13点①

少しずつ遅れる時計昭和の日

高塚 文子

8点①

西瓜割地球叩いてしまいかり

茨城県教育委員会教育長賞

大野 悅子

茨城県生活環境部長賞

川崎とみ子

12点②

書けそうで書けぬ遺言花は葉に  
大野ひろし

茨城県議会議長賞

高野よしこ

12点①

道草も学びの一つ蝌蚪に足  
高野よしこ

茨城県市長賞

山口 富雄

11点③

詰め過ぎの母の引出し敗戦忌  
黒澤みどり

茨城県市議会議長賞

飛田 伸夫

11点①

泣く時はほたるぶくろの中がいい  
ハーレーの漢も来たる彼岸寺

笠間市市教育委員会教育長賞

大野ひろし

10点

たばこ屋の名残りの出窓昭和の日  
中川 芳子

茨城県市觀光協会長賞

伊沢とよ子

9点①

あと一年あと一年と田水張る  
安藤 玲子

茨城新聞社賞

山根 延子

8点③

まだ命あるもの担ぎ蟻の列  
小川みのる

春を詰めアフガンへ行くランドセル

星子 恵巳

齢とは足し算ばかり夏落葉 早瀬 貞夫  
ジーパンを蹴飛ばして脱ぐ花疲れ 岡里 共子  
妻逝つて空洞となるかたつむり 高野よしこ  
ドロップ缶の底の暗がり敗戦日 根本菜穂子  
非正規のままに四十路や啄木忌 飛田 伸夫  
青しぐれ花屋の角に椅子がある 平野 悅子  
弟の星を加へて銀河濃し 小島シン子  
復興の奥久慈鉄路風簫る 小川みのる  
夏つばめ自在に空を裏返し 中島 晖子  
墨痕は昭和と読める梅酒漬 服部 青甫  
花蜜柑風に香の濃き島岬 樋崎 道  
水戸城に石垣のなし椎の花 新井 洋澄  
遠目にも案山子のシャツは父のシャツ 安藤 玲子  
ひもすがら落花を掬う水車かな 杉田なか子  
走り根の岩に食ひ込む溽暑かな 山田 健太  
風を入れ波音を入れ夏期講座 飛田 伸夫  
小判草ふやし年金暮しかな 山口 富雄  
ハーレーの漢も来たる彼岸寺 伊沢とよ子  
連帆の先頭雲をつかみおり 坪 文雄  
母が来て風鈴掛けて帰りけり 井坂 あさ  
大夕焼残り時間ふと思ふ 神谷たくみ  
たばこ屋の名残りの出窓昭和の日 桜井 幸江  
退院の我が家の匂い小鳥来る 伊沢とよ子  
囁りや耳の消えたる磨崖仏 山口美津子  
百歳の父に小春の往診医 石川 昌利  
宇宙から笑顔の返事みどりの夜 永井 弘子

ジーパンを蹴飛ばして脱ぐ花疲れ 岡里 共子  
妻逝つて空洞となるかたつむり 高野よしこ  
ドロップ缶の底の暗がり敗戦日 根本菜穂子  
非正規のままに四十路や啄木忌 飛田 伸夫  
青しぐれ花屋の角に椅子がある 平野 悅子  
弟の星を加へて銀河濃し 小島シン子  
復興の奥久慈鉄路風簫る 小川みのる  
夏つばめ自在に空を裏返し 中島 晖子  
墨痕は昭和と読める梅酒漬 服部 青甫  
花蜜柑風に香の濃き島岬 樋崎 道  
水戸城に石垣のなし椎の花 新井 洋澄  
遠目にも案山子のシャツは父のシャツ 安藤 玲子  
ひもすがら落花を掬う水車かな 杉田なか子  
走り根の岩に食ひ込む溽暑かな 山田 健太  
風を入れ波音を入れ夏期講座 飛田 伸夫  
小判草ふやし年金暮しかな 山口 富雄  
ハーレーの漢も来たる彼岸寺 伊沢とよ子  
連帆の先頭雲をつかみおり 坪 文雄  
母が来て風鈴掛けて帰りけり 井坂 あさ  
大夕焼残り時間ふと思ふ 神谷たくみ  
たばこ屋の名残りの出窓昭和の日 桜井 幸江  
退院の我が家の匂い小鳥来る 伊沢とよ子  
囁りや耳の消えたる磨崖仏 山口美津子  
百歳の父に小春の往診医 石川 昌利  
宇宙から笑顔の返事みどりの夜 永井 弘子

## 〔課題句の部〕課題「正」

## 大会賞



大野ひろし氏の受賞  
〔課題句の部〕



小沼 悅子 氏の受賞  
〔募集句の部〕

茨城県知事賞

大野ひろし

正義とは貫き難し蘆の錐

井川 水衛

12点② 八月や修正液で消えぬ過去 小沼 悅子

正直は涼しあやまち誰にでも 椅子よりは正座が楽と生身魂

北田 久雄

茨城県議会議長賞 森井 省二

椅子よりは正座が楽と生身魂 夏座敷正座を拒む膝頭

小川みのる

12点① 正座より始まる修行蟬時雨

「正常な体温です」と夏つばめ 夏座敷正座を拒む膝頭

高橋 和彌

茨城県教育委員会教育長賞 森井 省二

「正常な体温です」と夏つばめ 夏座敷正座を拒む膝頭

高橋 昌子

7点 正装の父の遺影や夏座敷 笠原 真枝

「正常な体温です」と夏つばめ 夏座敷正座を拒む膝頭

綱川 清

茨城県生活環境部長賞 笠原 真枝

「正常な体温です」と夏つばめ 夏座敷正座を拒む膝頭

飛田 伸夫

7点 尺蠖の折目正しき一步かな 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

笠嶋 武山

笠間市長賞 村上 咲 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

外岡 勇

笠間市議会議長賞 村上 咲 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

眞家 薜風

6点 大正のロマンの話かき氷 村上 咲 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

笠原 壮介

笠間市教育委員会教育長賞 浅野とし子 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

眞家 薜風

6点 廃校に残る正門つばめの子 藤 洋子 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

川崎とみ子

笠間市観光協会長賞 藤 洋子 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

5点 村度の担ぐ正論亀の鳴く 浅野とし子 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

茨城新聞社賞 佐藤 和子 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

5点 背泳ぎに浮いて正午の陽のにおい 川崎とみ子 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

茨城県俳句作家協会長賞 塩谷きみこ 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

4点 正論に逆らう蟻のBとC 鶴岡しげを特選 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

4点 正直に生きて真の汗を拭く 鶴岡しげを特選 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

茨城県現代俳句協会長賞 梁 岳遊 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

4点 正直に生きて真の汗を拭く 鶴岡しげを特選 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

茨城県現代俳句協会長賞 高橋 和彌 特選 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

4点 正直に生きて真の汗を拭く 鶴岡しげを特選 伊沢とよ子

正面に万緑置きて父の里 正眼に構へコロナと対峙せり

大野ひろし

# 第二十九回 作品奨励賞

柿のれん

永井 淑子（牛久市）

蛇穴に扶養家族の一人増え  
嫁迎う村の家々柿のれん

想ひ出も束ねて捨てし更衣  
抽斗の奥のその奥夏期手当

日に二便最終バスは西日中

幼子のムンクの叫び夜の雷

千羽鶴正しく折りて夏は来ぬ

駅弁の紐は固くて原爆忌

一言も語らず父の終戦曰

右じやない左じやないと文字摺草

盆の僧ベニツ遠くに置いて来る

木の実降る洗いざらしの紺エプロン

加齢です女医の一言鰯雲

秋祭り黒髪茶髪農を継ぐ

一合の酒とおでんと流行唄

継ぎ接ぎの母の記憶や帰り花

マスクしてマスクの夫に会釈され

三島忌や眠りしままの愛読書

不揃ひの鉛筆五本受験待つ

言い訳の一日足りぬ冬椿

十二月八日は永久に巡り来る

無人駅ぶつきらぼうに春兆す

八方の風に迷へる落葉掃く

おおつごもり故郷つなぐ上野駅

鸞やうぐいす色の風の徑

花筵上座はえくぼの三歳児

はからずも転んで目の合ういぬふぐり  
月臘活断層の上の墓所

烟を打つ私がわたしでいるうちは

三葉葵の紋の国から新茶来る

恋はなき猫と窓辺の柿若葉

雨音の着地乱るる泰山木

野の花と密で遊ぶや夏の蝶

お話はハッピー エンド麦は芽に

若きパパ水鉄砲に死んだ振り

夕焼けを使いきるまでボール蹴る

爺婆の怪獣といふ夏休み

シャツの裾出して風切る麦の秋

噴水の頂のごと傘寿かな

鶏頭花カレー無性に食べたい日

農機具の納屋の奥まで稻光り

理科室の骸骨つるべ落としかな

梅ひらく

矢口 富久（小美玉市）

春匂ふ小さき駅の伝言板

春を詠む数ふる小指余りけり  
ネモフイラの丘にこぼれる空の青

想ひ出も束ねて捨てし更衣

抽斗の奥のその奥夏期手当

日に二便最終バスは西日中

幼子のムンクの叫び夜の雷

千羽鶴正しく折りて夏は来ぬ

駅弁の紐は固くて原爆忌

一言も語らず父の終戦曰

右じやない左じやないと文字摺草

盆の僧ベニツ遠くに置いて来る

木の実降る洗いざらしの紺エプロン

加齢です女医の一言鰯雲

秋祭り黒髪茶髪農を継ぐ

一合の酒とおでんと流行唄

継ぎ接ぎの母の記憶や帰り花

マスクしてマスクの夫に会釈され

三島忌や眠りしままの愛読書

不揃ひの鉛筆五本受験待つ

言い訳の一日足りぬ冬椿

十二月八日は永久に巡り来る

無人駅ぶつきらぼうに春兆す

八方の風に迷へる落葉掃く

おおつごもり故郷つなぐ上野駅

# 私の一句

(掲載は到着順)

涼しげな顔の大黒柱かな  
高橋つや子

行く末のなお謎めきて四万六千日  
梅原 公子

除夜の鐘耳を持たないこけしの目  
齋藤 和子

梅の園杖は指し棒丁寧に  
野村 洋子  
夏蝶の大きな影や忠魂碑  
根本菜穂子  
かなかなやなかなか餡に届かない  
元旦は八分休符から第一歩  
松岡月虹舎

梅の園杖は指し棒丁寧に  
野村 洋子  
夏蝶の大きな影や忠魂碑  
根本菜穂子  
かなかなやなかなか餡に届かない  
元旦は八分休符から第一歩  
松岡月虹舎

枇杷熟るるワクチン接種淡々と  
岡里 共子  
四葩咲く瑞穂の国は水豊か  
飛田 伸夫  
自肅生活の羽子から声も足も出て  
白土 昌夫  
植田早や淡き緑の風生まる  
伏屋 雅子  
ナイターの灯のいきいきと無観客  
山田 健太

梅の園杖は指し棒丁寧に  
野村 洋子  
夏蝶の大きな影や忠魂碑  
根本菜穂子  
かなかなやなかなか餡に届かない  
元旦は八分休符から第一歩  
松岡月虹舎

香水の瓶眺めているしわせ  
河野 正子  
真木女史の転生かとも黒揚羽  
土屋佐奈江  
福耳の夫楽しげに餅を焼く  
小松崎黎子  
退院の我が家のかい小鳥来る  
大野ひろし

香水の瓶眺めているしわせ  
河野 正子  
真木女史の転生かとも黒揚羽  
土屋佐奈江  
福耳の夫楽しげに餅を焼く  
小松崎黎子  
退院の我が家のかい小鳥来る  
大野ひろし

シャキシャキと夏を背負つて曾孫が来  
勝山ひろし  
風鈴は風のことばよ啓泰忌  
北田 久雄  
ふにやふにやの太陽を生む春の海  
川崎とみ子

シャキシャキと夏を背負つて曾孫が来  
勝山ひろし  
風鈴は風のことばよ啓泰忌  
北田 久雄  
ふにやふにやの太陽を生む春の海  
川崎とみ子

我が道をひたすら歩む蝸牛  
井坂 あさ  
ひとつずつ音符呪えて夏つばめ  
平野菜穂子  
無医村に生き存えて夕端居  
飯塚 芙紅  
正論を吐いて左遷や四月馬鹿  
野口 英二  
梅雨明くる先ずは背筋を伸ばそうか  
柳 浩二

我が道をひたすら歩む蝸牛  
井坂 あさ  
ひとつずつ音符呪えて夏つばめ  
平野菜穂子  
無医村に生き存えて夕端居  
飯塚 芙紅  
正論を吐いて左遷や四月馬鹿  
野口 英二  
梅雨明くる先ずは背筋を伸ばそうか  
柳 浩二

白雨去り橋の下より子ら散りぬ  
黒澤みどり  
問診の女医のまなざし梅雨晴間  
宮本喜実世  
風呂敷も畠も四角文化の日  
糸賀 瞳子  
家訓足すなんじやもんじやの幹周り  
笠岡多美子

白雨去り橋の下より子ら散りぬ  
黒澤みどり  
問診の女医のまなざし梅雨晴間  
宮本喜実世  
風呂敷も畠も四角文化の日  
糸賀 瞳子  
家訓足すなんじやもんじやの幹周り  
笠岡多美子

月のぼる男おどりを合の手に  
犬山 京子  
幾何のいのち預けて夕焼ける  
土田 信子  
梅雨明くる先ずは背筋を伸ばそうか  
梅井 玲子

月のぼる男おどりを合の手に  
犬山 京子  
幾何のいのち預けて夕焼ける  
土田 信子  
梅雨明くる先ずは背筋を伸ばそうか  
梅井 玲子

激変の世の鎮まれと稻光  
根本きよ志  
枯野駄母が居さうで降りてみる  
小池つと夢

激変の世の鎮まれと稻光  
根本きよ志  
枯野駄母が居さうで降りてみる  
小池つと夢

馬の仔の四肢にみなぎる好奇心  
神谷たくみ  
薰風やベットの傾斜八十度  
高橋三智子  
鍼置けばほどよき疲れ啄木忌  
網代奈津江

馬の仔の四肢にみなぎる好奇心  
神谷たくみ  
薰風やベットの傾斜八十度  
高橋三智子  
鍼置けばほどよき疲れ啄木忌  
網代奈津江

疫病も豪雨も止まず残暑かな  
堀川 豊彦  
スイングジャズの流れる日和しやぼん玉  
高野よしこ

疫病も豪雨も止まず残暑かな  
堀川 豊彦  
スイングジャズの流れる日和しやぼん玉  
高野よしこ

上弦の月に揺られて逢ひに行く  
菅原 伸江  
落蝉の静さよ夕の風さらう  
安藤 玲子  
行く秋や大仏様のたなごころ  
浅野とし子  
出刃研いで何んと頑固な南瓜割る  
笠原 壮介

上弦の月に揺られて逢ひに行く  
菅原 伸江  
落蝉の静さよ夕の風さらう  
安藤 玲子  
行く秋や大仏様のたなごころ  
浅野とし子  
出刃研いで何んと頑固な南瓜割る  
笠原 壮介

# 受贈誌紹介

|                                  |        |   |                               |
|----------------------------------|--------|---|-------------------------------|
| 古文書の贈答御札雲母虫<br>空蟬や握れば壊れそうなもの     | 小松崎黎子  | 柿の花落下する時愚痴すこし                           | 小沼 慎子                         |
| 抗体と競わすように菊芽刺す<br>ふるさとの匂いの中に飾り焚く  | 長谷川 進  | 「ひたち野」2021年七月号（主宰・矢須恵由）                 | 伏屋 雅子                         |
| かさぶたの隠す鈍痛飛花落花<br>八月号             | 山口 富雄  | 朝毎に日付確かめ竹の秋<br>おぬしらも密集密接葱坊主             | 糸須 恵由                         |
| オクラ苗植えて疲れの元作る<br>紺碧の空より布袋草の花     | 野村 洋子  | 日常のひびわれてゆく聖五月                           | 豊かなる土偶の乳房春闌る<br>専城師偲ぶ湖中忌葱坊主   |
| アカシヤの房の重さを持て余し<br>来年と云うあやふやへ置く梅酒 | 宮本喜美世  | 九月号                                     | 飛田 伸夫                         |
| 裏木戸は母の近道濃あじさい<br>夏羽織さらりと脱ぎて無観客   | 新井 洗澄  | 梅雨空や大谷翔平のみ光る<br>晩年の孤独慰む花芒               | 袴塚 竜子                         |
| アカシヤの房の重さを持て余し<br>来年と云うあやふやへ置く梅酒 | 梅井 玲子  | 縁先に丸い黄花のあふれてる<br>「龍の玉」2021年五月号          | 成り行きに任す他なし実梅落つ<br>境界線蟻の屍を蟻が引く |
| 裏木戸は母の近道濃あじさい<br>夏羽織さらりと脱ぎて無観客   | 北田 久雄  | 廃校は映画のロケ地鱗雲<br>斜交いに坐して黙食猫の恋             | 矢須 恵由<br>天下井誠史                |
| 花街の名残の路地や濃紫陽花<br>脳外科の切り取る画像すでに秋  | 高橋 和彌  | 戒名に真木の眞の文字冬の兩<br>「鶲鳴」2021年五一号（編集長・山田健太） | 森井 省二<br>新緑や縁ありて住む鳥居前         |
| 盗人のように入り来る隙間風<br>全長を隠せる蛇のとぐるかな   | 井坂 あさ  | 史美みな虚実に満ちて返り花<br>セーターが私の形になる不安          | 安藤 玲子<br>栗田 幸一                |
| 表現の自由不自由地虫鳴く<br>百人風呂背の無防備に髪洗う    | 長谷川 進  | 針のない時計ばかりや日短か<br>五二号                    | 櫻若葉笠まで蒼き親像像<br>竹筒の一輪涼し一会の茶    |
| 夕立のトタン屋根より始まり<br>五三号             | 岡里 共子  | 軒低き木小屋藁小屋山桜桃<br>夜灌の音ひそやかに黙々と            | 高木 静水<br>鹿熊 登志                |
| ひとり居に涼しき風を招きをり<br>第二七三号          | 宮路 久子  | 紫陽花やビカソに青の時代あり<br>石田誠一郎                 | 印南 美都<br>金澤 踏青                |
| 空蟬の生まれる形死ぬかたち<br>第三四号            | 高野紀世子  | 令和三年第52回原爆忌東京俳句大会に於いて、小松崎黎子さんが受賞されました。  | 高野紀世子                         |
| ひとり居に涼しき風を招きをり<br>第三五号           | 飯田ヒロ子  | 一般社団法人東友会、東友会賞                          | 飯田ヒロ子                         |
| 八月の水流れゆく爆心地<br>第三六号              | 小松崎 黎子 | 八月の水流れゆく爆心地                             | 小松崎 黎子                        |

## 『お知らせ』

## 句会探訪

### 《龍ヶ崎俳句俱楽部》

続けて行きたいと思っている。（安藤玲子記）  
八月定例句会 兼題 山滴る・夏の山

### 《龍ヶ崎俳句俱楽部》

湖廻ぎて最澄の山滴れり

佐久間敏高

平成三十年十二月に行なわれた「炎帝俳句

会年次大会」を最後に、（真木主宰の急逝）

「炎帝俳句会」が解散された。「何らかの形

で俳句活動を継続したい」という要望に元炎

帝会長を中心、役員の話し合いが持たれ、

三十一年一月十四日「龍ヶ崎俳句俱楽部」が

結成された。会長は佐久間敏高さんで、会員

は全員元炎帝の人達である。（現在二十四名

前年度より新会員一名）

例会は毎月一回、第三月曜日、投句は三句

（一句兼題、二句当季雜詠）、選句は七句（特

選一句）。年間の優秀者には賞品などが贈ら

れる。又、吟行や新年会も第一回のみで以後

はコロナ禍のため中止となっている。会誌

「龍の玉」は年二回の発行で、中味は俳句の

みならず、色々満載である。会員も大分高齢

になつてゐるが、皆頑張つて意義ある句会と

なつてゐる。

まだ歩き始めた「龍ヶ崎俳句俱楽部」であ

るが、引き継ぎ俳句の灯を消さぬよう、歩み

山頂の石に石積む夏の山

秋の蝶休耕田に沈みゆく

爽やかや十六羅漢押し来て

山裾に祠祭りて山滴る

石筍の御仏のさま滴れり

ゆく夏の沼のほとりの河童像

川村伊津子

松原 利子

一日を上手に暮し白木槿

道少し濡れて静けし秋の虹

相澤 泰子

海猫の高き低きや雲の峰

伊沢とよ子

青き嶺初めて搾る牛の乳

菅原 伸江

眼裏のふるさとの山滴りぬ

森井 省二

道端にハイビスカスの搖るる街

朝靄のあがる湖夏の山

大の字のころがつて夏休み

短夜の生きるにほどよき物忘れ

野口 浩子



## 《私の歳時記》

# 「松島の光」

とく ぐいち

三冊子に「師、松島にて句なし。」とい  
う記述がある。この前に芭蕉の別のところ  
での文言が理由のように引用されている。  
内容は《①絶景に我を忘れた時はその印象  
を強くして書き写し、後で句作せよ、②こ  
れと反対に心が動かぬ場合も承知してお  
け、③また思いがあふれてまとまらない時  
はただ書き写すだけでよい》である。なら  
ば、句が成立するのはどうかというと「物  
の見えたる光、いまだ心に消えざる中にい  
ひとむべし」だ。これは②でも③でもなく、  
①が一番近い。①の絶景に見惚れて没我す  
(本意・本情)が表出されるというのだ。

だが、こうした機会はそうそう訪ねず、書  
写の推敲に句作は委ねられる。しかし松島  
の場合は不調に終わり『おくのほそ道』に  
「眠らんとして寝られず」と書かざるを得  
なかつたのだ。その理由は「私意」を離れ  
自然と一体化する際の玄妙に詩が生まれる  
「体験」に拘泥しすぎたからだと推量され

る。私には「言語を離れて俳句はない」が  
基本なので、人間は言語(記号)によって  
世界を分節し、それを認識していると考え  
る。芭蕉のように最初から物と心が別々に  
実在するとは考えないし、「竹の事は竹に  
習へ」の「竹」の内奥に恒久不变的な「不易」  
が潜むとも想定しない。第一「竹」と  
「松」は言語を以て分節しない限り見分け  
がつかない。言語を獲得する以前も人間は  
漠然と世界に対峙しておらず、感覚はすで  
に志向性や選択性を有していたはずだ。そ  
してそこで得た印象を記憶する。そしてこ

要領を得ない文章だが、私が吟行をしな  
い理由を終始書いたような気がする。

コロナ感染症による緊急事態宣言解除に伴  
い、相次ぐ食品等の値上げの波が家計を直撃  
し、厳しい秋の訪れとなりました。  
そんな中、十一月十六日(火)現代俳句協  
会副会長、秋尾 敏氏を講師に、本年度活動  
計画の一環として「全句講評会」を開催致し  
ます。

今号の「私の一句」に対する鑑賞文など  
を、お送り下されば掲載させて頂きたいと考  
えております。

新たな企画を膨らませて、次の活動に繋げ  
られたらと考えております。

〈高野・佐藤〉

あ

と

が

き

令和三年十一月 第139号

発行人 高橋 和彌

発行所 茨城県現代俳句協会

編集人 高野 よしこ  
元 312-0011

事務局 山口 富雄方  
元 307-0001 行方市手賀二四六

編集所 結城市結城二二〇八七一七

印刷所 石岡印刷有限公司  
元 315-0013 茨城県石岡市府中一三三一